

ならない。Yano 先生はまさにそうでした。しかし、日本語が上手である立派な研究者が必ずしも良い翻訳者というわけではありません。Nichibunken Monograph シリーズを長年編集してきて、現在の感想としては、専門の研究者よりもむしろ優秀なプロフェッショナル翻訳者が望ましいと考えています。

モノグラフシリーズは、単なる英訳本ではありません。著者は、和文から英文への変化プロセスの各段階において、訳者と編集者と緊密に作業を行わなければなりません。英訳ドラフトを丁寧に残したり、訳者がふさわしい言葉を選択できるように和文のニュアンスを説明したりする必要がありません。また、著者自身が自分のテキストを、英語圏の読者のようなフレッシュな目で検証することも必要です。本来は、英訳に入る前に原稿を書き直した方が良いものになるでしょう。翻訳者と編集者に任せておけば、魔法のように立派なモノグラフが出来上がるなどというのは無理なことです。また、英語圏の学術書のほとんどは索引付きのため、モノグラフシリーズにも索引が望まれます。索引作成のためにも、著者の知識や協力が必要です。

このような事情によって、Nichibunken Monograph シリー

ズは、他の日文研の出版物に比べると、刊行までに時間がかかります。共同出版相手を探したり、交渉したりするのに時間もかかります。良い英訳として成長するには時間が必要で、著者・翻訳者・編集者の間を行きつ戻りつしながら、新しい本は生まれます。大変な手間はありますが、その結果、自分の研究成果が世界へ広がり、未知の研究者や学生とつながり、海外へ行かずとも自ずから海外交流が行われるのです。一流の英訳のおかげで、日文研の評価も一層高まるのではないかと思われまます。それを、私は目指しています。

(国際日本文化研究センター教授)

ネットワーク形成の現場より

旧ユーゴスラヴィアの日本研究

細川周平

八月末から九月初頭にかけて、旧ユーゴスラヴィアのベオグラードとザグレブを旅してきた。今はセルビアとクロアチアの首都である。分離・独立して二〇年ほどたつのに「旧

姓」で呼ばれることは、どちらの国民にとつても不快かもしれないが、一九七九年から八〇年にかけて、そのユーゴスラヴィア政府給費生として、ザグレブ音楽アカデミーで学んだ者には、どうしても昔の名前が頭に残ってならない。振り返れば、その一年は一修士学生が「学者」なり「評論家」なりに脱皮する転換点だったとずいぶん前から確信しており、三二年ぶりの訪問は通常の出張を超えて、個人的に重い意味を持つ旅だった。それは別の機会に譲るとして、業務についてここでは報告しておきたい。

ベオグラード大学文学部で開催された「近代文化・スラブと日本の対話」国際研究会（八月二八日〜二九日）に出席するのが、出張の主な目的だった。右記の給費生の同期で、現在はベオグラード大学文学部日本文学教授をつとめる山崎佳代子さんと一去年（二〇一一年）、河原町のギャラリーで開催された彼女の詩の朗読会で再会を果たしたことが、参加のきっかけだった。研究会は彼女とダリボル・クリチコビッチ助教が適宜、通訳をつとめながら、日本語とセルビア語で行われ、一部はセルビア人のロシア語発表を日本のロシア文学者が要約するような場面もあった。通訳が入らなかつたのは、二、三の英語発表（そのなかには、私の「日系ブラジル

文学史概論」も含まれる）だけだった。二〇数名ほどのこじんまりとした会であればこそ、臨機応変に四ヶ国語を切り替えながら、ほぼ全員に内容を伝えることができた。

セルビア側の発表者の話題を挙げると、山崎佳代子さんは二〇世紀初頭のセルビアの詩人にして文筆家イシドラ・セクリッチが、フランス語やロシア語文献を読みつつ理解した茶の湯と能について述べた。同じく、コルネリア・イチン氏からはアンナ・アフマートバという同じ時期のセルビアの詩人が、浮世絵から受けた深い印象について教わった。パブレ・パプロビッチ氏は二〇世紀ポーランドの日本の伝統文化解釈を取り上げ、東欧のモデルニズムに与えた俳句の衝撃について論じた。西欧に対する日本文化の影響は十分に調査されているが、東欧でも十分に展開できそうだ。『竹取物語』と『古事記』の翻訳者、ダニエラ・バシッチ助教教授は『竹取』から中世・近世文学までを求婚のテーマから概観した。このほか、ダニロ・ヴァシレヴというセルビア人画家が、ロシア、北米、オーストラリアに渡り、その間、ジャポニズムに近づいたことを現在シドニーに在住のジャ・ボイッチ氏が豊富な図版を用いて説明した。

セルビア人発表の白眉はダリボル・クリチコビッチの日本

語（とセルビア語）によるロシア文学と夏目漱石に見る「余計者」のありようの比較だった。クロアチア生まれでセルビアに住み、ほとんど顧みられない日本文学を研究する自分を居場所のない人間、余計者と感じていることが、出発点だったそうだ。自分のありようの根本で漱石を読んだうえで、明治文学の基礎を作った（そして東欧インテリゲンツィアの知的参照点である）ロシア文学と比較する仕事は、単に海外の漱石文献が一本増えたという以上の意味を持つと思った。

旅の後半では今では「国際列車」となった急行でザグレブに移動し、ザグレブ大学言語学部インド極東学科のクララ・ジェネ・モアザニン教授、同学科のミスラヴ・イエジッチ名誉教授らと面会することができた（辻優大使のはからいに感謝します）。ザグレブ大学の森葉月講師によれば、日本への関心は高く（マンガ、アニメ、格闘技、映画など）、一年目には三、四〇名の学生がいるが、卒業までたどりつくのは四、五名にすぎず、中国の孔子学院のような強力な支援が欲しいとのことだ（クロアチアの高校ではハイク、ハイカイはほぼ必修なのだそうだ）。上の二教授も、インド学の専門で日本

については英語などから学んだり、重訳で古典を刊行した。英語による日本文化の授業は大歓迎とのことなので、日文研でも協同事業を展開できるといい。スラブ文化の周辺にあるセルビアと、スラブ語圏にありながら、オーストリア・ハンガリー帝国の影響を濃く受けたクロアチアの日本との接触の歴史の違いが、感じられた。

三〇年前にはひとつの国家のなかの異なる共和国だった。そしてかつてセルボ・クロアチア語と称していた言語が、分離後はそれぞれ別の国語に制定された。その違いは方言の違い程度だと傍目には見えるが、ダリボルさんが感じるように、当事者にとってはその一見小さな隔たりが人を識別するマーカーとなる。日本文化研究のありようも、同じように似ていながらずいぶん違う。日文研としては、それぞれの国や大学の事情をくみ取りながら、昨年度のブダペスト研究会で始まったばかりのバルカン諸国との交流を進めていくべきだろう。

（国際日本文化研究センター教授）